



な負担となるため、近年では高等学校の募集を停止する学校が増えてきています。中高一貫校への入学を希望する場合は、中学受験から考えるほうがよいでしょう。中高一貫校の増加により、高校受験者数が減ったという見方もあります。とはいえ、中高一貫校は、まだ全中学校の1割にも達していません。文部科学省が中高一貫教育を推進しているため、今後の増加は予想できますが、まだまだ多くの中学生は、これまで通りの高校受験を経て中高一貫校ではない高等学校へ進学することになるでしょう。

高校受験の次は、大学受験です。高等学校卒業者の大学・短期大学の進学率は年々増加していますが、少子化が進み高等学校卒業者数は年々減少しています。学生数確保のため、中学校・高等学校と提携する大学が増えています。「附属校」という形だけでなく、「準附属校」「系列校」などの形をとって推薦枠を増やしたり、併設大学への推薦権を保持したまま他の大学を受験できるようにしたりと、各大学で工夫を凝らしています。行きたい大学に附属校や系列校があるのなら、高等学校を受験しておくほうがよいでしょう。

大学受験を優位にするための高校受験、高校受験を優位にするための中学受験と、受験の優位性だけを見ると、どんどん若い年齢での受験となってしまいます。ですが、小学校の時点で、自分の行きたい大学や、将来なりたい職業などを決められるでしょうか。「受験」することが目標ではありません。行きたい学校が見つかった時に、最善の「受験方法」を選べるように、どのような選択肢があるのかを事前知っておくことが大切であると考えられます。(文/学林舎編集部)

創り、人生や社会をどのようによりよいものにしていくのか、子どもたちは自ら考えて行動していかなければなりません。

未来の創り手である子どもたちの、そんな「生きる力」を、より具体化して育成するために、中央教育審議会による2年にわたる審議の末、新しい学習指導要領が提示されました。

### 【「生きる力」の具体化、育成のための3つの柱】

- ①「何を知っているか、何ができるか」  
→実際の社会や生活で生きて働く「個別の知識・技能」の習得。
- ②「知っていること・できることをどう使うか」  
→未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成。
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」  
→学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の養成。

これらを、小学国語でどう実現していくのでしょうか。2020年度から使用される新しい教科書は、「国語を何のために学ぶのか」「国語を学んでどんな力が身につくのか」という教科の意義を明確化し、子どもたちがその意義を実感できるような内容となっています。従来は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」で構成されていた内容が、よりわかりやすく具体的に、以下のように構成し直されました。

個別の知識・技能	思考力、判断力、表現力等
(1) 言葉の特徴や使い方	A. 話すこと・聞くこと
(2) 情報の扱い方	B. 書くこと
(3) 我が国の言語文化	C. 読むこと

## 2019年 学習の行き先 小学校教科書改訂一国語編

現在の日本では、グローバル化や技術革新が進み、社会構造がめまぐるしく変化しています。今の子どもたちが成人して、社会で活躍する頃には、今まで以上にグローバル化や急速な情報化などの変化が見られる時代を迎えているでしょう。そんな時代の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を

文章を正確に理解したり、自分の思考や思いを適切に表現したりするには、「話す・聞く・書く・読む」に加え、「言葉の持つ特徴や、場面によっての使い方・使い分け」「話や文章に含まれている情報の読み取り方や扱い方」、そして根底となる「我が国の言語文化の理解」といった知識も必要です。新しい教科書は、理解したり表現したりする様々な場面の中で生きて働く、子どもたちの「個別の知識・技能」を育むことを明確に意識し、そういった「個別の知識・技能」を用いながら思考力・判断力・表現力等を養う教育をしやすいように編成されています。

人工知能(AI)が飛躍的に進化し、人間に取って代わる時代が来ても、人間にしかない感受性と理解力、表現力を持って、目の前の困難や未知の課題にも積極的に取り組み、発信することのできる「生きる力」を持った人間の育成を目指しているのです。

(文 / 学林舎編集部)

## 2019年 社会の行き先 学歴について考える

「どうしてこんなにたくさんの教科を勉強しないといけないのだろう?」「好きな教科だけ勉強してはいけないのかな?」「数学の公式って、将来必要なの?」こんなふうに思ったことはありますか。なんのために勉強するのか、なんのために大学に行くのか、わからなくなったことはありますか。そんなときに、『学歴』をつけたためだよ」と言われたことはありますか。

『学歴』とは何でしょうか。辞書には、「学業に関する経歴」とあります。『学業』とは「勉強をすること。学校での勉強」です。つまり、『学歴』とは「自分はこれまでに、こういう学校でこんなことを勉強してきました」ということを示すものです。

では『学歴』は、どんなときに必要なのでしょうか。多くの人は学校を卒業すると、働き始めます。もし企業で働くなら、就職試験があり、そのときに提出する履歴書には、必ず学歴を記入するようになっています。大学に入り、卒業した、という『学歴』は、多くの場合、「この人は、この大学に入るために一生懸命に努力した」と解釈されます。勉強の過程で、思うように進まず、成績が上

がらなかったり、行き詰まったりすることは必ずあります。そこから抜け出すために工夫したり、やり方を変えたりする必要があるでしょう。その結果、無事に合格、卒業できたということが「仕事で困難に直面したときに、自分で考えて乗り越えることができる人」と判断する材料の1つになるのです。

就職するにあたって、『学歴』を持っていると有利なことは多くありますが、もちろん『学歴』のためにだけ勉強をするわけではありません。大切なのは『学歴』ではなく、『勉強すること』そのものです。いろいろな教科を勉強すればするほど、そしてその分野での勉強を深めれば深めるほど、自分が興味を持てるものに出合える可能性が広がるのです。

地理を勉強するとき、単に地名とそこで採れる野菜だけを覚えるのは楽しくないかもしれませんが、「どうしてそこでその野菜が採れるのだろう」と調べてみると、意外な理由が見つかって、そこに行ってみたくなるかもしれません。実際に行ってみると、その場所の気候や地形など、教科書からはわからないことが見えて、興味を持てるかもしれません。そのことが将来の職業につながる可能性も出てきます。

数学が苦手な子どもたちにとって、公式を覚えて使うだけでは楽しくないかもしれません。ですが、大人になって銀行にお金を預けると、利息がどのくらいになるのか、また将来、ローンを組むときに、金利がどれくらいになるのか、計算式のしくみがわかればすぐに計算ができます。普通預金の金利が0.001%、定期預金の金利が0.2%だったとして、100万円を1年預けると、いくらのお利息がつくでしょう。はっきりと頭に思い浮かべることができれば、決断する手助けになります。

将来、料理人になりたいと思っている人は、毎日料理だけをしていけばよいわけではありません。日本ではいろいろな野菜や魚を手に入れることができます。食材をおいしく食べるために、どんな調理をすればよいか、組み合わせる食材は何がよいか、といった栄養に関する知識が必要です。

いろいろな教科を勉強して興味のあることや知識が増えると、将来できることや、将来の職業の選択肢が増えるだけではなく、人生を豊かにすることにもつながります。どんな大学や企業に入りたいかではなく、「どんな人間になりたいか」ということを考えるときにも『学歴』は必要不可欠な要素の1つなのです。

(文 / 学林舎編集部)

# クロスロード Cross Road

第100回 文／吉田 良治

## 令和元年

今回でCross Roadが100回目となりました。長く続けさせていただき、学林舎の北岡社長には大変感謝しております。

今回のテーマは今年新しい元号になった“令和”を取り上げます。今年5月1日の新天皇即位に伴い、新しい元号として令和になることが、4月1日に発表されました。当初令和の令を命令と連想された人も多かったかもしれません。実際令について“Order”や“Command”と訳した海外メディアもありました。政府もあわてて令の意味を“美しい”とし、令和は“Beautiful Harmony”と説明しました。この令和の意味の説明と、典拠が日本に現存する最古の和歌集である万葉集であることなど、新しい元号“令和”は国民に広く支持が広がっていきました。過去の元号は全て中国の漢籍が典拠とされてきましたので、国書由来初の元号ということも支持される大きな要因といえます。

今年はスポーツ界の指導の現場はもちろん、家庭での子供の躰、学校や職場での指導など、様々なところでパワハラや体罰が多く発生しました。令和の令が“Order”や“Command”という意味にとらえられるのも、日本人の根底にある暴力・支配的な一面もあるのかもしれませんが。昭和の時代には当たり前だった家庭での躰、教育やスポーツ指導の体罰、そして企業の職場でのパワハラも、平成で発生した体罰・自殺といった痛ましい事件を経て、美しい和・令和という新しい時代が変わった今、令和という言葉にふさわしい国民性を育てていくうえで、国民一人一人が正しい人としての在り方を見直す必要があります。

国際的NGOセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの調査によると、日本人の6割が体罰を容認する考えを持

ち、子育て中の親の約7割は体罰の経験がある、と答えています。今月厚生労働省は家庭や教育の現場で何が体罰になり、職場で何がパワハラにあたるかを示すガイドライン案を作成しました。しかし、親、教師、スポーツ指導者、そして職場の上司などは、今までの躰や指導がNGとなると、どう指導していいのかわからない、という方も少なくないでしょう。

今年は2つの高校で体罰・パワハラ防止のセミナーで講師の依頼をいただきました。どちらの高校でも生徒の指導でどう接するべきか、今までの指導法ではパワハラととらえられないか不安を抱えている方もおられました。

今年PHP研究所からスポーツコンプライアンス・パワハラ防止の教材“実践！グッドコーチング”が発売されました。スポーツ庁や日本スポーツ協会が製作協力し、私はスポーツ指導者の立場でこの教材制作に協力しました。ただ、この教材は体罰やパワハラに認定される事例集をもとに、体罰・パワハラ指導をしない＝ブレーキの役割で、正しい指導のためのアクセルになる機能がありません。正しい指導を実践で取り組むことがなければ、結局“(体罰を)するな(Order)！”という指針だけでは効果は期待できません。

スポーツにはスポーツマンシップというスポーツ活動における重要な心構えがあります。しかし、日本のスポーツ界ではスポーツマンシップを掛け声で終わらせ、正しく実践されることがあまりありません。正しいスポーツマンシップの実践とその継続をもとに、健全なスポーツ運営が実現できれば、スポーツ界の体罰やパワハラといった問題は減少していきます。そしてスポーツマンシップを社会へ共有し、社会にある体罰やパワハラの解決にもつながっていきます。

来年はいよいよ東京五輪・パラリンピックが開催されます。日本が令和という新しい元号にふさわしい国であることを世界に示すうえで、スポーツ界の責任は重要です。(つづく)